世界を周るは転生者(チート)ｉｎ恋姫無双

チルノ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
世界を周るは転生者（チート）ｉｎ恋姫無双

【Ｎコード】
Ｎ１８１１ＢＡ

【作者名】
チルノ

【あらすじ】
リリカルな世界のあとのお話。
まだ書いてないがＳｔｓのあと転生して此処に来た感じです。
ここでは魔法はほとんど使いません。よくて治癒とかです。
ではでは桜花君の激動の恋姫物語！はじまりはじまり！

でもやっぱチート・・

プロローグ（前書き）

同時進行です。けいおん！のへまはもう犯さない・・！！！

プロローグ

はいどうも、毎度おなじみ桜花君です。えー現在リリカルな世界でも活躍している俺ですが。
同時進行で恋姫の世界に来た話しをしたいと思います。
あ、でね？予断なんだけど、転生の度に性格が変わる見たい。肉体に精神が引っ張られる感じで、まあ容姿なんていくらでも変えられるんだけどね？で、今回は優しいお兄さんだって！！だからリリカルの方とはかなり別人となってるよ！気をつけてね！？

「さて、お知らせ的なのも終わったところで・・此処はどこかな～？」

目の前に広がる広大な荒野。どうしようかと考える。
すると、後ろから気配がして振り返る。そこには原作でも見る三人の賊。

「兄ちゃん、珍しいもん着てんじゃねえか……金目のもんと一緒に身ぐるみ置いて行きな！」

「早く、渡した方が身のためなんだな！」

「オラオラ！早くしろよ！！！」

ふむ、確かに俺の現在の衣装はリリカルの時のバリアジャケットとほぼ同じだ色は多少変わったが。
この国にはこんな服は確かに存在しないだろう。ん～？よく見ると

俺の下に倒れている人がいる。
こ、こいつは！あの恋姫主人公にして種馬！北郷一刀じゃまいか！！

「おい、おい！起きろ！」ぺちぺち

「う～ん・・はっ・・ここは・・？」

「とりあえず、立てるか？」

「あ、ああ・・ありがとう・・えとあんたは？」

「ああ、俺は・・そうだな、性を風、名を華、字を衝だ風華と呼んでくれ。」

「あ、ああ（この人の名前・・此処は日本じゃないのか・・？）、え～と、俺は北郷一刀。性が北郷で名が一刀になる。字はない。」

「あ、自己紹介中悪いけど今そんな状況じゃないんだわ。」

「え？」

一刀君が後ろを見るそこには無視されまくって、怒りまくってる賊の三人。今にも切りかかってきそうだ。

「ええ！？何この状況！？」

「一刀君、君は刀使える？」

「え？あ、はい一応」

俺は空間から二振りの太刀を取り出す。二対一刀の双刀、黒刀と白刀だ。その内の白刀を手渡す。

「君には辛いかも知れんが、覚悟を決めてくれ。」

俺は一刀君にある覚悟を迫る、別に今じゃなくともいいが早くに決めるに越したことはない。

ーーーーーー人を殺す覚悟を

「え？どういう・・？なっ・・まさか！？」

一刀君が驚いている。

「人を殺す覚悟だ。」

一刀君が沈んでいる。悩んでいるようだ。

「ま、嘘ですけどね☆」ずしゃあ！

そう言って俺は三人の賊を一瞬で切り払った。

「んなっ・・！？」

「じゃ、話を続けようか。」

一刀君は白刀を返してくる。俺はそれを受け取りしまう。

・　・　・

結論から言えば、一刀君は俺に付いてくることになった。行くあても無いから当然か。
そう言えば、一刀君が荒野で襲われてる時趙雲さんとかが助けに来るはずだけど・・来ないね。
今がいつの時代なのか確認しないと！

「なあ一刀？とりあえず村に向かうぞ？いいか？」

「いいよ、桜花。まかせる」

ちなみに俺と一刀は真名を交換しました。

「んじゃ行こうか。」

そうして二人は歩き出す。

――――これが天の御使いと後の最強の単騎戦力の旅の始まりだった。

二話にして別離！？そして出会う曹操（前書き）

なんか、展開が読めない・・

二話にして別離！？そして出会う曹操

結論から言うと、俺と一刀は旅の道中いろいろなことを話した。この世界が一刀いわく（俺も知ってるけど）三国志と言う時代と言うコト、一刀が未来から来てこの世界の未来を知っている事。今は原作の１２年ほど前であること。など俺の事はまあほどほどに教えた、知識があることは内緒、力の事も内緒だけど。まあ、性格面や何をやってるか？とかね。そんなこんなで村に着いたと思ったら、街についた。未来の覇王、曹操の故郷っぽい。

「ま、結果的には良いってことで。曹操さん家に挨拶行こうか。」

「そうだな。俺も今の時代の曹操に会ってみたいし。」

「じゃ、決定。行こう」

「ああ」

・

・

・

「でも、お前聞いたか？」

「なにを？」

「なんか、どっかの占い師がこの漢の時代を救う天の御使いってのが来るって言ったらしいよ？なんでも見たことない格好をしてるんだと。これお前の事じゃね？」

「え、マジか・・多分そうだな・・どうすればいいんだ？こういうとき」

「知らん。だが・・まあ、仕官する分には問題ないだろう。なんせ未来ってのを知ってるんだし？」

「そっか・・」

なんか一刀君が思い耽ってる・・まあ、なにか思うことがあるんだろうね。

「さ、着いたよ。すいまっせーん！誰かいますかい？」

「あら？誰かしら？」

あらら、曹操さんに似てる女の人だ。おそらく・・母親かな？

「ん～・・天の御使いさんとその付き人です。」

「ちょっ・・！？」

「へえ・・天の御使いさんが何の用かしら？」

彼女の目が細くなる、品定めしているような感じだ。

「いえ、ちょっと挨拶に。よければこの仕官しようかと。」

俺は一刀に今は俺に任せろとアイコンタクトを送る。

「あら、そうなの？・・・・確かに占い通り綺麗な服を着てるわね・・・・」

「でしょう？どうでしょう？」

「・・・・」

一刀君が黙ってる。天の御使い少しは喋れよ。

「証拠はあるのかしら？天の御使いたるその証拠は？」

「ふむ・・この天の御使いは・・そうですね、隠すことも無いでしょう。この人はこの国の未来を知ってます。」

「なっ・・・！？そう・・それは本当・・・・みたいね。嘘をついてるようには見えないし。」

「ですか。あ、申し遅れました俺は性を風、名を華、字を衝と言います。こっちは」

「あっ・・お、俺は北郷一刀。性が北郷、名が一刀だ、字はない。」

「ふ～ん・・そ♪私は性を曹、名を映、字は震よよろしくね？」

「ええ、よろしくお願いします。では」

そう言い、俺は一刀を残して去る。すると一刀と曹映さんがひきと

めてきた。

「え？待ってくれよ。桜花？」

「あら？貴方は来ないの？」

「ええ、俺はここに士官はしません。それにこの方とも別々の道で進もうと約束しましたしね？」

「ふ～ん、まあいいわ。」

・・・一刀がなんか話したそうだ。しかたない・・

「じゃあ、少しこの方と話しても？」

「ええ、良いわよ。」

「じゃあ、少しだけ」

・

・

・

「どういうことだ？桜花？」

「俺は、この時代の未来を知らない。でもお前が話してくれた中では曹操ちゃんが一番の勢力になるんだろう？」

俺は、ここに来る途中少しだけ一刀に未来を聞いた。知ってるけど

「あ、ああ・・」

「なら、お前はそこに居た方がいい。一番安全だし、暮らしにも余り困らない。仕事さえできれば置いてくれるだろ。」

「なら、お前も残ればいいじゃないか！」

「俺は残らない。もう少しだけこの世界を見て旅がしたいんだ。」

俺は一刀にそう言う。

「そうなのか・・」

「そう心配するな。大丈夫、俺は死んだりしないよ。この世の中は確かに物騒だ、でも俺は大丈夫。だからお前は生きてくれ。俺はお前の事を親友だと思ってる。だから生きてほしい、お願いだ一刀。」

俺は真剣に一刀と向き合う。

一刀はしばらくうつむいていた後、顔をあげてこういった

「分かった。だから俺と約束してくれ。必ず、生きてまた会うって。そう約束してくれ！」

「・・分かった。良いよ、必ず生きて、また会おう！一刀！」

「ああ、ここまでありがとう。約束だ、親友！！」

「おう・・じゃ、またな。」

そう言って俺はまた去ろうとするとまたも引き留められた。

「ちょ、ちょっとまってくれないかしら！！？」

「え？曹映さん・・？えと・・なにか？」

思わず聞き返してしまう。どうしたんだろう？

「はあ・・はあ・・あの、うちの娘の曹操を見てないかしら・・！！」

「曹操・・ちゃんですか？」

「見てないよな？桜花・・？」

「ああ・・どうかしたんですか？」

「いなくなっちゃったのよ・・城にはどこにもいなくて・・見かけたら連れて来てくれる？」

「はあ・・まあいいですけど。いくつですか？その曹操ちゃんは？」

おそらく原作の１２年前だから６，７歳くらいなはずだ。原作じゃみんな１８歳超えてたし。

「ええ、７歳よ。しっかりしてる子なんだけど・・いかんせんまだ子供だから・・」

「ああ・・分かりました見かけたら連れてきます。では・・またな、一刀・・」ぼそっ

「！・・ああ、またな！！」

俺と一刀はそう言って別れた。いい奴だねぇ・・一刀は。

・

・

・

で、今俺は困惑している。

なぜなら・・・

「えと・・どうしたの？君・・名前は？」

「曹・・・猛徳・・」ぐすっ

そう、曹操ちゃんに会ったからだ。しかも泣きつかれている。

なぜこうなったのか、説明しよう。

＊

「さて・・と。曹映さんの領地は抜けたけど・・曹操ちゃんは一目見たかったな。ははは・・」

そう言って領地の外の森を歩く。
かなり歩いていたが、日も暮れている。村も見えないので野宿の準備をしていると

「んー！！んー！！！」

「こらっ！ガキ！大人しくしやがれ！！」

とそんな声が聞こえた。まあ、この性格上助けないわけも行かない。
声の方に歩いて行くと、そこには小さいが5，6人くらいは入れそうな小屋があった。
そこからさらに声が聞こえる。

「もういいから、殺しちまおうぜ。このクソガキ」

「ん・・確かに、奴もさぞ悔しがるだろうな！」

「んー！！んー！！」

はあ、行くか・・！！

ドカッ！！！

入口のドアを蹴り壊して入る。そこには拘束された幼い少女と取り囲む3人ほどの男がいた。その内2人は武器を構えてこちらを見ている。・・・クズだなこいつら。Ｙｅｓ！ロリ！Ｎｏタッチ！という言葉を知らんのか？

「なんだ！てめえ！」

「邪魔するな！なんならお前から斬り殺してやる！！」

そう言って武器を持っている二人が斬りかかってくる・・が遅い。

チンッ！

と鍔鳴りの音が響く。俺が刀を鞘にしまった音。
すると、二人は腹から血を噴き出して絶命した。残りの一人は怯えながら逃げようとしたが。鋼糸で首を落とす。
そしてその中心にいる拘束され、泣いている短い金髪の女の子に近づく。

「ん・・んー！！」ぽろぽろ

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルッ

拘束を解いてやる。

「けほっ・・あ・・あなた・・だれ・・？」

「ん～・・正義の味方さ♪」

そういってほほ笑む。すると安心したのか気を失ってしまった。それを支え、抱き上げる。
よほど怖かったんだろう、そして俺は野宿しようとしていた場所まで戻る。

「さて・・火でも焚いて、まずは食糧だな。ま、別空間に入ってるから困んないけど。」

俺はその日少女に毛布をかけて寝かせてやり、飯を食べて眠った。

・

・

・

で、翌朝。川があったので水を汲んでいると泣き声が聞こえた、少女が起きたようだ。

それで戻ると、少女と目が合う。その少女は俺を見つけると近づいて抱きしめてくる。

で、最初の場面になるわけだ。

＊

「ん？じゃあ、きみが曹操ちゃん？」

「え・・？私を知ってるの？」

朝食を二人で食べている時にそう聞くと、曹操ちゃんはびっくりした顔でそう言う。

「ん、まあ曹映さんに聞いたからね。」

「お母さん・・？」

「そ、きみを見つけたら連れてく様に言われたからね。」

そういうと曹操ちゃんは安心したように笑った。

・・・この子が将来・・百合になるのか・・・なんだかなあ・・

「じゃあ、曹操ちゃんはなんでこんなところに？曹映さんの領地からはかなり遠いところだけど此処。」

「えと・・勉強してたんだけど・・嫌になって飛び出して来たら・・昨日の人達にさらわれて・・気が付いたらココにいたの」

「・・・そっか」

俺は曹操ちゃんに近づく。そして抱きしめて安心させるように言った

――――怖かっただろう？頑張ったね、よく頑張ったね。

すると曹操ちゃんは抑えていた感情を吐き出すように、ぽろぽろと大粒の涙を流した。

・　　・

・

・

「落ち着いた？」

曹操ちゃんは何も言わずにこくんと一つうなずいた。

「そうか、それじゃあ。お母さんの所へ連れてってあげる。歩けるかい？」

「うん」

「じゃ、行こうか。何かあったらすぐに言ってね？」

「うん／／／／」

顔が赤い、熱でもあるのだろうか？そう思い、曹操ちゃんの額に手を当てる

「ふえ！？／／／／」

「ん～顔が赤いから熱でもあるのかと思ったけど・・大丈夫そうだね」にこっ

「／／／／／」

う～む・・ますます顔が赤い。この先大丈夫だろうか？

そう思いながら、二人で歩く。

「曹操ちゃん」

「あ、あの！」

「え？な、なに？」

急に曹操ちゃんが声をあげる。驚きながらも聞き返す。

「あの・・華琳って呼んでください・・！」

「でも・・それは真名だろう？いいのかい？」

「はい・・い、命を救ってくれたし・・その・・／／／／／」

まあ、預けてくれるのはうれしい。ありがたく受け取っておこう。

「うん分かった、いいよ。あ、俺の名前教えてなかったね。俺は性を風、名を風、字を衝って言うんだ。じゃあ、俺も真名を預けよう、俺の真名は桜花。よろしくね華琳ちゃん」

しゃがんで華琳ちゃんの目線に合わせ微笑んでそういった。すると華琳ちゃんは顔を赤くしながらも言った

「は、はい！よろしくお願いします！お、桜花さん！／／／／／」

顔真っ赤・・ああ、照れてるのか。可愛いねぇ、微笑ましいよ。

そんなこんなで、真名を交換した。

・

・　・

・

華琳視点

＊

私は、今ある人と故郷に向かって歩いている。
先日勉強が嫌になり飛び出したところ、賊にさらわれた。
そして抵抗していたけど・・子供の力では大人の男の人３人は振り払えなかった。
しびれを切らした賊達は私を殺そうとした。その武器の煌きが私の恐怖心を奮い立たせ、身体を硬直させた。

「んー！！んー！！」

私はそんな状態で精一杯叫んだ。涙を流しながら、助けて！とそうして遂にその刃が振り下ろされそうになった瞬間

ドカァ！！！

扉を破壊して見たことない服を着た男の人が入ってきた。
そしてそれを見た賊の二人がその人に斬りかかる。私は目を瞑った。
しかし

「遅い」

そんな声で目をあけると男の人は立っていた。すると傍に居たもう一人の賊が急に青い顔で逃げていくすると、その賊は急にふらりと

倒れた。みると首が体から離れている。

「ん・・んー！！」ぽろぽろ

怖かった。次は私が殺されるんじゃないかと思ったから。

すると、その男の人は優しい声で私の拘束を解きながら言った。

「大丈夫、俺は君に何もしないよ。大丈夫かい？」スルッ

それで喋れるようになった私は聞いた

「けほっ・・あ・・あなた・・だれ・・？」

「ん～・・正義の味方さ♪」

そう答えた男の人の笑顔を見て、私は意識を失った。

そして、今その人が私は好きになった。その笑顔が余りに綺麗だったから。一つ一つの仕草がとてもかっこよく見えたから。

そして勇気を振り絞って、真名を預けた。するとその人は笑顔で私の目線に合わせてかがみ、桜花という真名を預けてくれた。

＊

「でだ、華琳ちゃん。」

「なんですか？桜花さん」

桜花さんが真名を呼んでくれたことに少し嬉しく思いながら聞き返す。

「華琳ちゃんはどうして飛び出してきちゃったのかな？」

「あ・・やっぱり勉強が嫌になったから・・」しゅん

少し落ちこみながら言う。

「そうか・・まあ、根を詰めるのはあんまり良くないからね。でも勉強自体は悪いことじゃない。分かる？」

「はい」

「まあ、ほどほどにした方がいいんだよ。俺も曹映さんに言ってみるから、自分でも自分の考えをぶつけてごらん？言葉にしないと伝わらないこともあるんだから。ね？」

桜花さんの言葉は説得力があり、なぜか納得できた。

「はい！」

私は桜花さんの不思議と安心できる雰囲気がさらに好きになった。

・

・

・

曹映視点

「あの子はまだ見つからない？」

「え、ええ・・俺の方も見かけないですね・・」

私は天の御使い、北郷一刀に先刻から何度も確認している。昨日から食事ものどを通らない。

「報告します！」

すると一人の兵士が入って来る。

「どうしたの？華琳は見つかった？」

「はっ！そのことでございますが・・曹操様が何者かにさらわれたらしいとの報告が・・」

「なっ！？それはいつの事！？」

「はい・・昨日の昼ごろだと・・」

兵士は言いづらそうにそういった。私はそれの余りの衝撃に脱力する。

「そ、早急に探し出してくれ！」

なにも言えない私に代わって北郷がそう言うと、兵士は了解と去っていく。

「華琳・・」

「曹映さん・・大丈夫さ！きっと大丈夫・・！！」

慰めてくれるが、私はなにも聞こえなかった。

・

・

・

桜花視点

さて・・・華琳ちゃんと共に曹映さんの領地に戻ってきた俺こと桜花。

「さて、帰ってきたね。」

「はい」

「曹映さんも心配してるだろうし、さっさと帰ろうか」

「はい！」

で、華琳ちゃんの家に向かって歩いていたら。

囲まれました。Ｗｈｙ？何故？

「あのー？一体なんの騒ぎです？」

「黙れ！曹操様をさらったのは貴様か！！」

あるぇ～？華琳ちゃんをさらったの俺になってない？

「・・あの・・俺、その華琳ちゃんをさらった奴のして連れてきたんだけど？」

「曹操様の真名まで！？貴様！どこまでも無礼な奴！！」

話し聞いてよ・・

「なあ、華琳ちゃん・・これどうすればいいのかな？」

「さ・・さあ・・？せめて母が来てくれれば・・」

幸いなことに華琳ちゃんが俺のそばに居るせいか中々かかってこない。つまり硬直状態だ。

「ん～・・・」

と、考えていたら。

「華琳！！」

「母上！」

と曹映さんが来た。

曹映さんは俺を見ると兵士を下がらせた。

「え～と・・貴方が華琳を？」

「え？それはさらったのか？と聞いてます？」

「い、いえ助けてくれたのかと・・」

「そうですよ。殺されそうになったのを助けて、曹操と聞いて約束通り連れてきたんですよ。」

「あ、ありがとう！！」

はあ・・ここの兵士は話を聞かないと記憶しとこう。

「いえいえ、では俺はまた行きますね。」

と踵をかえして行こうとすると――

「華琳様をさらったのはおまえかあああああ！！！！！！！」ブン！！！！

ガキィン！！！！

「え～・・なに君・・？」

なんか襲われました。

二話にして別離！？そして出会う曹操（後書き）

最後のは原作でも華琳様主義なあの姉妹の姉です。

夏候惇登場、旅の始めと惨劇（前書き）

今回は、曹操さんとこから出発します。

夏候惇登場、旅の始めと惨劇

今、俺は困惑中である。
なぜなら・・・

「えと・・もっかい聞くけど・・きみ誰？」

「我が名は夏候惇！華琳様の矛にして楯！そして！貴様を殺す相手だ！！」

不意打ちよろしくさらに連打で体に見合わない大剣を振るう少女、名前は夏候惇と言うらしい。
つまりは原作で華琳ちゃんの右腕だったあの子ですね？

「で、それは分かったけど・・なんで俺が攻撃されてるの？」

その攻撃を軽く受け流しながら問う。幸いまだ扱い慣れてないのか、剣の腕は未熟だったので俺の相手をするには幾分幼い。

「貴様が華琳様をさらったからだ！！」ぶんぶん！！

「ちょっ・・それ勘違いじゃん・・！！・・・・仕方ない・・ふっ！！」ギィン！！

俺は大剣を持つ夏候惇ちゃんの腕の隙間に刀を滑り込ませ、峰で柄をはじく。
すると簡単に大剣はその小さな手からこぼれおちた。

「あっ・・き、貴様・・！！」

「そこまでよ、春蘭・・」

「え？か、華琳様？」

「ちょっと来なさい・・」ずごごご・・

なんか華琳ちゃんに黒いオーラが見えるんだけど・・怖っ！

で、華琳ちゃんが夏候惇ちゃんを連れてどこかへ行ってしまった後、曹映さんが詫びてきた。

「悪かったわね、あの子華琳の事になると周りが見えなくなっちゃうものだから・・根はいい子なのよ？頭はよくないけど・・」

「いえいえ・・それとそこに居る子はどうしたのかな？」

俺は、俺の後ろの方・・夏候惇ちゃんの来た方に隠れている少女に問いかけた。

その子はおずおずとした感じで出てくる。

「あの・・夏候淵です。さっきの夏候惇の妹です。」

「へ～・・君は元気な夏候惇ちゃんとは違って大人しいんだね？それでどうかした？」

俺は、華琳ちゃんの時同様目線を合わせて話す。

「えと・・さっきは姉が失礼しました。ごめんなさい」

ぺこりと頭を下げて謝る夏候淵ちゃん。ちょっとびっくりしながら

も優しく言い返す。

「気にしないで。それだけ華琳ちゃんを大事に思ってるんだろうさ。」

「・・ありがとうございます。」

ふむ・・昔の夏候淵ちゃんは結構口数が少ないんだねぇ・・でも凛々しい顔をしてる。

「あの、風華さん？ちょっと良いですか？」

曹映さんが話しかけてくる。

「なんですか？」

「あ、北郷もいい？」

「あ、ああ。いいよ」

「それで、風華さんと北郷には華琳を助けてくれたこととこれから私と共に歩んでくれることで真名を預けたいのだけど・・良いかしら？」

ん？・・どうやら曹映さんは俺達に真名を預けてくれるらしい。これは嬉しいじゃないか。

「もちろん良いですよ。俺の真名は桜花です。あなたに預けましょう」

「あ、ああ・・俺は一刀だ真名はないからこれが真名になる・・のかな？」

「桜花に・・一刀・・確かに預かったわ。私の真名は縁華。よろしくね！」

曹映さんはとてもいい笑顔でそう言った。すると俺の羽織をくいくいと引っ張る者がいる。

下を見ると夏候淵ちゃんが居る。

「どうしたの？夏候淵ちゃん？」

「私もお礼に・・真名を預ける・・私は秋蘭」

「・・いいの？」

俺は急なことに少し驚いたが、そう聞く

「いい。華琳様を助けてくれたから。」

「そっか、じゃあ秋蘭ちゃん、俺の真名は桜花だ。よろしくね」にこっ

目線を合わせて笑顔でそう言うと。秋蘭ちゃんは少し赤くなりながら

「よろしくお願いします・・・／／／」

そう言った。華琳ちゃんといいどうして赤くなるんだろうか！

「ん、それじゃあ俺はそろそろ旅に出ますわ。じゃあ、今度こそま

たな一刀」

「ああ、またな桜花」

「じゃあ、失礼します縁華ちゃん。秋蘭ちゃん」

挨拶をして踵を返す。その時に縁華ちゃんがちゃん付けで呼ばれたことに少し赤くなっていた。

・

・

・

街の出口に着くと、華琳ちゃんと夏候惇ちゃんが居た。

「桜花さん、言っちゃうんですか？」

華琳ちゃんがしゅんとした感じで言う。というかあの未来の覇王さんに敬語使われてるよ俺・・結構すごいことじゃない？

「ああ。・・・そんな顔しない、大丈夫また来るさ。」

「本当ですか！」

華琳ちゃんの顔がぱあっと輝く・・が夏候惇ちゃんがこちらを見ている。

「えと・・さっき秋蘭ちゃんに会ったよ。姉がすいませんってね」

「うぐっ・・秋蘭に会ったのか？それに真名まで・・」

「うん、最後の方顔が赤かったけど・・あの子風邪でも引いてるの？口数も少なかったし。」

俺は二人に聞いてみる、今思えば夏候淵ちゃんの様子は軽い風邪と言われても信じるかもしれない。

「・・・ぶつぶつ・・・まさか・・・秋蘭まで・・・？」ぼそぼそ華琳ちゃんは少し悩む様になにかをつぶやいている。夏候惇ちゃんは少し考えた後

「まあ、大丈夫だろう！なんせ私の妹だからな！」

開き直った。

「じゃあ、俺はそろそろ行くよ。またね華琳ちゃん、夏候惇ちゃん」

「まて！私の真名も預ける！私は春蘭だ！」

「おお・・いいのかい？・・それじゃ俺は桜花だ。よろしくね？」

やっぱりかがんで目線を合わせて言う。

「お・・おお・・・／／／」

やっぱり赤くなった。・・・なんだろう？華琳ちゃんから鋭い視線が・・

なぜ俺が目線を合わせるかって？それは真名を交換するなら対等だと思っているからだよ。性別も年齢も関係なく対等な目線で関係を築きたいからだよ。

「それじゃ、またね。」

そうして俺は後の魏と呼ばれる地を出た。

・

・

・

しばらく歩き、華琳ちゃんと出会った場所らへんまで来た。
村はどこにあるか聞けばよかったと後悔する桜花君だったのだ・・・
はあ・・

「ん～・・それにしても・・どこに行こうか。あと12年もあるしなぁ・・原作まで。取り合えず孫策ちゃんトコとか董に卓ちゃん各村に行ったりして過ごそうかな。」

さらに桜花は歩いていく。

「んん？なんだか物騒な雰囲気だな・・」すっ

桜花の顔が少し険しくなる。すると進行方向から

わー！！・・・・・・きゃあああ！！・・・・があああ！！

と叫び声が聞こえる。どうやら村が襲われているようだ。俺は出来るだけ急いで村へと駆けた。

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

とある村

ある少女視点

くっ・・・なぜ・・なぜこんなことに・・！！

私の村は今、賊達に襲われていた。多くの村人だ逃げていく中、仲の良かった友人やおじさん、おばさんが目の前で死んでいく。すでに私の顔はくしゃくしゃになっている。涙と恐怖心から来るからだの震えが止まらない。

「うっ・・・ぐす・・・」

私の父と母、兄が武の心得を持っていて、賊の討伐に当たっている。私はまだ幼く何もできない、よって家の中に押し込められた。

「ぎゃああああ！！」

その声に私は顔をあげる、聞き慣れた声・・一層不安と恐怖が募る・・

そして目に入った光景は、兄が首から血を噴き出し倒れ駆け寄った父と母が賊に刃を突き立てられたところだった。

「あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

叫ぶほかに私は出来なかった――――

・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・

三者視点

村に着くと、目の前で殺される親子？達。そして一拍遅れて響く叫び声

「あああああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！」

その声に気付いた賊が一件の民家に入って行く。
だが黙って見ていられるほど、桜花の心も穏やかではなかった。
民家に近づいて中を見ると、賊が黒髪の少女の腕を掴んで下卑た顔で連れて行こうとしていた。
「いやっ！はなして！！」
「へへへ・・大人しく来い！クソガキィ！！」
そのやりとりで俺は中に入り込む。
「その子を離せ、このクズ野郎」
静かな声でそういった。
「ああ？なんだてめえ？まあ、いい野郎には興味ねぇんだ！死んでくれや！！！」
男はそう言って血がべっとりついた刃を振りおろしてくるが――――――――その刃は届かずに、男の命が終わる。
男は、叫ぶこともできずに一瞬で絶命した。
桜花はただ、刀で斬り伏せただけなのに、男や少女は何をしたのか

分からなかった。

桜花は少女に近づき、優しく言った。

「もう大丈夫だ」

少女は、その顔に安心し両親や兄の事を思い出した。
悲しみで心が壊れそうになる、そんなとき自分を包み込む温もりがあった。

「悪かった・・もう少し・・早く来ていれば・・すまない、だから今はその悲しみは俺が受け止めよう。」

その言葉で少女は吹っ切れ、桜花の胸の中でただただ泣き叫んだ。

「うわああああああああああああああああ！！！！！！！！！！！！！！」

桜花はその少女を泣きやむまで、抱きしめ続けた。

夏候惇登場、旅の始めと惨劇（後書き）

最後の少女は、次回明らかになりますが、ヒントは黒髪、賊のトラウマ、未来の劉備軍の将です。

出会う関羽、決意する桜花（前書き）

ちなみに、この桜花君は魔法、魔術、超能力、過負荷・異常、忍術等は一部をのぞいて使えません。詳しくは主人公設定を次辺り書きます。

出会う関羽、決意する桜花

少女を落ち着かせた俺は、生き残っていた村人と村長の所へ案内してもらった。
そこで少女と俺と村長で少し話をしている。

「それで、この村の状況はどうなってる？」

「はあ・・あまり芳しくありませんね・・村人も約半数が死んでしまいました・・」

「そう・・ですか」

思ったよりこの村の状況はよくないようだ、賊は俺が全員倒したので今は落ち着いているが、賊の本拠地にはまだ大勢の賊がいるだろう。そこを叩かない限り何度でも襲われるだろう。

「あの・・」

考えていると少女が話しかけてくる。

「ん？なんだい？えと・・・」

そう言えば名前を聞いていなかったな。まあ、容姿から多少予想は着いているのだけど。

「ああ、私は性を関、名を羽、字は雲長です。」

「そっか、じゃあ、関羽ちゃん？どうしたの？」

「はい・・あの助けていただきありがとうございました／／／／」

「ん？・・・ああ、どういたしまして。怪我がなくてよかったよ」にこ

赤くなっている、まあ泣いているところを見られたのが恥ずかしい

のだろう。

そう思いつつ、村長に話しをもどす。

「しかし、賊は拠点を構えているでしょう。そこを叩かない限りこ

れは何度でも繰り返されるでしょう。」

「ええ・・それは分かっておるんですが・・いかんせん向こうの数

が多くて・・」

ん？・・・原作の時点で賊が勢力をつけ始めているのだが・・既に

勢力の多い賊もいるのか・・

「どの程度です？」

「はい、約１００名ほどの数です。」

「ふむ・・では私が討伐してきましょう。」

「なっ・・駄目ですよ！死んじゃいます！！！」

と、黙っていた関羽ちゃんが声をあげる。

「ああ・・大丈夫だよ！関羽ちゃん。俺は強いから♪きっと君の村

を守って見せるよ」

俺は、安心させるように笑顔で関羽ちゃんにそういった。

「・・・はい・・でも、ちゃんと戻ってきてくださいね・・？」

あ、泣きそうになってる。ヤバい・・・それにしても・・この子も一刀とおんなじ眼をしてる。うん・・言い眼だ

「ああ、約束だ」

俺は親友とした約束をこの少女ともした。

「では、いいですか？村長殿？」

「え、ええ・・いいのですか？」

「ええ、俺もここらでちゃんとした決意を決めないと」

「決意・・？・・まあ、なんにせよお願いします。」

「はい、じゃあね関羽ちゃん。約束は守るよ」

そう言って俺は賊の討伐に向かう。

・

・

・

関羽視点

私は、不安だった。あの人まで死んでしまうのではないかと、しかし約束してくれた。必ず生きて戻ると。
だから私は信じて待つ。こんな時私の小さな手が恨めしかった、戦う力がないことが悔しかった。
だから私は、強くなろうと・・・決めた。

「村長・・私は強くなりたいです・・・」

「それは・・真か？本当になりたいのか？」

村長がいつになく真剣に聞いてくる。

「はい！この村を、この国を！守れるくらいに！！」

「・・・分かった・・お前の母より任された青龍偃月刀、今こそ渡そう。」

村長は私に母上から私に渡すように言われていたという青龍偃月刀を渡してくれた。
私はこれと共に強くなることを母に父に兄に、何より自分に誓った。

「さて・・ココが拠点なわけだが・・」

「あん？なんだてめえｈーーぶがあ！！」

俺は見張りを間髪いれずに叩きのめす。

「さて・・・ココがお前らの墓場だ。覚悟しろ賊共」

そう言って俺は、中に入って行く。
すると中には村長の言うとおり１００名ほどの賊がいた。

「ああ！？なんだてめえは！！」

「怪しい奴！全員！やっちまえ！！！」

おおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおおお！！！！！！！！

全ての賊が一斉にかかってくる。
だが、そんな極小の戦力は・・・

圧倒的な武力によって蹂躙される

人が吹き飛んでいく。桜花の一振りで5人ほどがいっぺんに死んでいく。
ただ繰り返される破壊の一撃。誰ひとり桜花を止める事が出来ずに恐怖した。

そして約半刻で、賊は壊滅した。

・

・

・

「・・・人を殺すのは、まだ慣れないな・・いや慣れてはいけないな・・さて村へ戻ろう。」

俺は村へ向かって歩き出す、背後には１００人の墓が作られていた。
そしてしばらく歩くと村へ着く。入口には関羽ちゃんが原作で使用していた青龍偃月刀を持ってたたずんでいた。

「・・・やあ、関羽ちゃん。その様子だと・・やっぱり？」

俺は関羽ちゃんがこうなるだろうと思っていた。強くなりたいと思うのだろうと。

「はい、私はこの手で大切なものを守れるようになります。」

「そう・・頑張ってね」二コリ

「は・・はい！！／／／／」

「そ、それでですね！！貴方に、わわ私の真名を預かってもらえませんかかか！！？」

「落ち着け。真名ね・・いいよ、俺の真名は桜花。よろしくな」

「は、はい！！私は愛紗です！！！」

ちなみに、この愛紗ちゃんは現在7歳である。いい？身長的には俺の腰上あたりに頭があるからね？
原作の愛紗ちゃんをイメージしないでね？後々困るから。

で、そんなこんなで村長のもとへ報告するとしばらく居てくれないか？と頼まれた。
まあ、時間もあるから1，2年ほどなら良いと言ってこの村に住まわせてもらうことになった。

「はあ、でも住居どうしよう・・」

「あ、桜花さん！」

「んん？愛紗ちゃん？どうしたの？」

「よければ私のうちに来ませんか！？」

「ん～？いいの？」

「はい！そ、それで代わりと言ってはなんですけど・・・私を・・・鍛えてくれませんか！？」

「いいよ。1，2年間だけどよろしくね？」

「はい！！」

そうして、愛紗ちゃんとの暮らしが始まった。

「はっ！今桜花さんに女の気配がしたような・・・！」

「華琳様！私もしました！」

「春蘭も？・・・今度来たら問い詰めないと・・・」

「仕事してくれよ・・」

「「うるさいぞ一刀」」

「はあ・・・桜花、結構つらいぜ・・この暮らし」

出会う関羽、決意する桜花（後書き）

では、次は恋姫での主人公設定です

旅立ち、そして次の出会い。（前書き）

はい、今回は2年後から始まります。

旅立ち、そして次の出会い。

どうも、桜花です。前回から2年経ちました。
え～・・中身は割愛ってことで。ちょっ・・ごめん！石をぶつけないで！・・・まて！その剣は伝説のエクスぎゃあああ！！

はい・・少しだけなら紹介します。

まず、愛紗ちゃんと修業しました。
原作に一歩どかないくらいの強さにしてみました、この分だと原作時には原作通りの強さになってるでしょう。

次に、愛紗ちゃんと添い寝した。まて！その構えた岩を捨てろ！！

とまあ、こんな感じで過ごしてたら。懐かれました。ええそりゃもう懐かれましたよ。
どれくらいかって言うと。

「行かないで！！言っちゃいやだーー！！」

と号泣しながら村長に取り押さえられて叫んでるくらいに。

「どうしたものかねえ・・」

はあ、なんとも・・教育を間違えたか？

「愛紗ちゃん、大丈夫。また会えるから。」

「ぐすっ！・・で、でもお！！」

ちなみに愛紗ちゃん、現在9歳。小学三年生と同じ年齢です。

「それじゃ、愛紗ちゃんがもう少し大きくなったらまた会いに来るよ。約束だ」

「ほ、本当!!?分かった!それじゃ私我慢する!!」

なんとかなったよ。すげえなおい。

「それじゃあ、またね。お世話になりました村長。」

「はは・・また来なされ。歓迎しよう。」

そう言って俺は村を出た。

で、出たのはいいんだけど。次は何処へ行こうか・・

「う～ん・・路銀も残り少ないしな～・・うん、進んでればどこかしらにつくだろう。」

としばらく能天気に歩いていたら。何やら騒がしい村に着いた。
村に入ると、ある家の周りに人が大勢集まっている。
「なんだろ・・むぐむぐ・・・行ってみようかな？」
と持っていた団子を食べ終えつつ近づいてみる。
で、近くの村人に問いかけた。
「あの、旅のものなんですけど。これは一体・・？」
「ああ・・今ねこの家に・・・まあ、お年を召したおじいさんと孫娘みたいな子が住んでいたんだけどね？」
「はい」
「実は、そのおじいさんが病でなくなってさあ。それで親戚連中が集まってまだ幼い孫娘を誰が預かるかってもめてんだよ。」
「誰も名乗り出ないのですか？」
気になってそういった。幼い娘一人くらいなら何の問題も無いはずだ。
「それが、この村は貧相でね。一人養うのも苦労するし、なにより何も分からない女の子預かるのもちょっとねぇ・・」
「そういうことですか。」
少しだけ、可愛そうに思えてくる。性格のせいか放っておけないよ

うだ。
つくづく甘いな、俺も。
「じゃ、俺が預かってもいいですよね？」
「え？・・まあ、いいんじゃないかい？」
「ですか、じゃ失礼しまーす」
俺は人をどけながら中心に入ってく。
抜けた先には悲しい顔で俯いてる少女とまあ・・村長的な人がいた。
「すいまっせーん。」
「なんじゃ？」
「その子誰も預かろうとしないんですよね？」
「・・ああ、そうじゃな。残念じゃが。」
「じゃ、俺が預かってもよろしいですか？」
「なっ・・お前さん何者じゃ？」
「俺は旅のものです。一人で旅するのもそろそろ飽きたんでね。」
村長は俺の眼をじっと見る。しばらく見ていると村長はにこりと笑い
「うむ、悪いものではないようじゃな。分かったこの子はお主に預かってもらおう。泣かせたり、酷い目に合わせたら・・ただではお

かんぞ・・？」

最後の方は物凄く真剣な思いが伝わってきた。うん、良い人だ。

「もちろんです。」

だから俺も真剣に返す。

「じゃあ、皆さん。この話はお終い！帰っていいですよ～」

すると村人たちは早々に散らばって帰って行った。

「さて」

俺は少女に近ずく、見てみると青紫というか青というかそんな色の髪をしている。頭には魔女の被ってるようなマジカルハットがあった。・・・てかこの子あの子じゃね？

「え～と・・君の名前は？」

「あぅ・・・ほ、ほーとーでしゅ・・噛んじゃった・・／／／／」

可愛いねぇ。が、まさかあの鳳統ちゃんだとは・・あれ？でも帽子にリボンが付いてないな・・？

「そっか。鳳統ちゃんか。俺は風華、これから君の家族になる。よろしくね？」

「は・・はい・・」

「でだ、聞いての通り。俺は旅人だ、だから君にも一緒にこの村を出てもらいたいんだけど・・いいかな？」

少し、心配だが出てもらうよりほかにない。

「は、はい！少し待っててもらえましゅか！？じじじ準備してきましゅ・・！」

と言い残して家の中に入って行ってしまった。噛み噛みだよ・・こんな幼いころからなんだね。

そして、しばらくして家から出てきた鳳統ちゃんと村をでた。

・

・

・

「さて・・鳳統ちゃん。俺はどこに向かうとか決めてないんだけど、どっちに行きたい？」

俺は無茶ぶりをしてみた。

「あわわ・・えと私が決めても・・いいんでしゅか・・？」

「うん、いいよ。それに家族なんだから敬語は使わなくてもいいんだよ？」

「あ、うん・・！／／／」

鳳統ちゃんが嬉しそうににっこり笑う。俺もつられて笑顔になった。

「それじゃあ、家族として真名を預けとこう。俺は桜花、よろしくね？」

やっぱり目線を合わせて笑顔で言った。

「わ、わたしは・・雛里です！／／／／」

「うん、よろしくね雛里ちゃん♪」

顔が赤いのは村からそうだけど、さらに赤くなったね・・

で、まあしばらく雛里ちゃんの勘を頼りに歩いていると、なんと村に着いた！

凄いよ雛里ちゃん！！

「いや～・・凄いね雛里ちゃんの勘は・・」

「えへへ・・」

「それじゃ、少し休憩しようか。」

「うん！」

歩いているうちに慣れたのか、余り会話中に噛まなくなったね。とっても嬉しそうに笑う雛里ちゃん。

「あ、そこに茶屋があるね。団子でも食べて今後を考えようか」

「うん！・・あれ？」

「どうした？雛里ちゃん？」

「いや・・あそこになにかひとだかりが・・？」

「あ～？あれか、いってみる？」

そう聞くと、茶屋と人だかりを交互に見る雛里ちゃん。ははは、微笑ましいね

「茶屋は後でも行けるさ、行ってみようか」

「あう・・うん・・」

そして人だかりに近づくと、そこには喧嘩をしている大人がいた。

「・・・茶屋にいこっか雛里ちゃん・・」

「うん・・」

そう言って茶屋に戻り、団子を食べながらまったりと過ごした。
そうそう、その途中で次は孫堅さんの領地に遊びに行こうってことになった。
まあ、雛里ちゃんも一度は行ってみたかったようですぐに決まったけどね。

旅立ち、そして次の出会い。（後書き）

おおっと・・雛里ちゃん登場です。ま、親戚中をたらいまわしにされる前に回収してみました。・・・あれ？たしか孔明ちゃんもそんな感じじゃなかったっけ・・？

主人公紹介（前書き）

忘れていた主人公紹介・・・
ど、どうぞ！！

主人公紹介

風華桜花の恋姫における主人公紹介

・性　風　名　華　字　衝　　真名　桜花

ちなみに名字の所はかぜはなと読みます。ふうかと読んでいた方、分かりにくくてすみません（焦）

ステータス

身体能力最強化、あらゆる力を操る程度の能力は健在

しかし、この世界においてはどういうことかナルトやブリーチ、めだかボックスで得た力が使用不可能になってます。
（作者のせいです。だってこの世界で斬魄刀の力とか忍術とか異常・過負荷使えたらだれも勝てないでしょう？）

しかし、能力は持たないが斬魄刀自体は使えます。例にするなら月牙天衝とか使えない斬月、凍らせることが出来ない氷輪丸。みたいなね？
あと戯言シリーズで得た曲弦糸、音使い、ナイフ使いは魔法とかでない単なる技術なのでもちろん使えます。

先程、書いた能力使用不可ですが。使用できる異常・過負荷が少しあることにします。
しかし相手にダメージを負わせる技は無理です。回復系も大嘘憑きほどのものはありません。精々、傷を塞ぐ程度。つまりは応急措置です。

まとめると

身体能力チート

あらゆる力を操る程度の能力

神様から貰った女の子に多少の縁がある加護

曲弦糸・音使い　使用可能

１０個ほどの異常・過負荷　使用可能ただし攻撃系統、因果律・常識を覆すほどの者は無理。

能力を持たない武器として使用できる斬魄刀

が使えるのが恋姫での桜花君です。

では次から本編です。

主人公紹介（後書き）

失礼しました・・・（汗）

雛里と桜花の旅・・・1（前書き）

今回からこのタイトルでしばらく続けたい。

雛里と桜花の旅・・・1

どうも、桜花です。
今、雛里ちゃんと旅してます。この前の茶屋の村から出て一ヶ月。色んな村を転々と旅して、今は呉に向かう途中で、洛陽に着いたよ！なんかさっき元の世界で見た赤と青のジャージ姿のキャラクターを見たんだけど・・聖徳太子と三国志って時代違うよね？

「う～む・・・」

そう考えていたら

「あの・・桜花さん？」

「え？」

雛里ちゃんが心配そうに話しかけてきた。まあ、細かいことは気にしない方がいいよね！

「大丈夫だよ。少し気になったことがあっただけだから。」

「そうなの・・？」

この一ヶ月で雛里ちゃんかなり俺の事に慣れたみたいで俺との会話だけならもう全く噛むことがないです。
すこしだけあの噛んでいた時期が懐かしい。でも・・なぜかときどき赤くなるんだよね、会話中に・・なんでだろう？

「よし、じゃあ今回はここで少し休もうか。」

「うん！・・でも、私達宿を取る路銀がないよ？どうするの・・？」

「う～んそうなんだよなあ・・」

そう、相も変わらず俺達にはお金がない。持ち物と言えば、俺は武器や衣服くらい雛里ちゃんは家に合った本や筆記具、着替え、勉強道具くらい。今思ったけど雛里ちゃんって有名な軍師になるんだよね。勉強が凄い出来るんだよこの子。

「あの・・それならここの領主さんに客将として雇ってもらえば良いんじゃないでしょうか？」

「ああ・・そうすれば衣食住くらいは確保できるね！良い案だよ、そうしようか。」

まあ、ここは将来董卓ちゃんが治める土地になるだろうし、過去の事は知らないけど多分董卓ちゃんの母親か父親が納めているんだろうね。

「じゃ、行こっか。雛里ちゃん」

「はい！」

そう言って、俺の手を繋ぐ雛里ちゃん。なんだか最近手をつなぐようになったなあ・・まあ良いけど。

そう言って城へ手を繋ぎながら歩いていく俺達。

・　・　・

で、着いた。
門番さんに言って領主さんに客将になりたい旨を伝えてもらう。
しばらく待っていると、領主さんかな？が出てくる。いいのかそれで・・・

「貴方が、此処に客将として雇ってもらいたいと言う者かしら？」

「ええ、それとこの子も・・文官として役に立つでしょう。」

「そう、なら少し試させてもらうわよ？」

「ええ、どうぞ。それとお名前を聞かせてもらっても？」

なんかこの人、董卓ちゃんに似てる。やっぱり母親かな？

「ええ、良いわよ。私は董君雅、この地を治める領主よ。」

やっぱり、董卓の父だったこの人も女なのか・・・

「そうですか、俺は風華です。こっちは鳳統、よろしくお願いします。」

「よろしく・・おねがいしましゅ・・／／／」

やっぱ俺以外だとこうなるんだな。雛里ちゃんや。

「それで、試すとは？」

「ええ、貴方の武を見せてもらうわ。」

「つまり手合わせをして見せろと」

「そうよ、貴方はあとで文官の試験を受けてもらうわ。いいわね？」

「あわわ・・は、はい！」

やっぱり、客将としての試験てのはこうなるんだね。小説とかでもよく見てたけど。

「で、誰とやれば？」

「あたしよ」

「・・・・もう一度聞きますけど誰とやれば？」

「あたしよ」

「あんた仮にも領主だろう？いいのかそんなことして・・」

雛里ちゃんも唖然としてるよこれ。

「いいのよ、さ！やるわよ！！ついてらっしゃい！！」

「はあ・・・」

董卓ちゃんの性格はこの人がいたからか・・納得だよ。

・

・

・

～中庭～

「さて、と・・準備はいいかしら？風華？」

「っと、良いですよ。雛里ちゃんそこで見てて。」

「うん・・大丈夫なの・・？」

雛里ちゃんが不安そうにしている。まあ・・俺が戦ってるのなんて見せたことないからなあ・・・

「大丈夫、俺は負けないよ。」

「・・・うん」

若干まだ不安そうだが、納得してくれたようで雛里ちゃんが離れていく。

「じゃ、始めましょうか」

俺は白と黒の双刀を構える。

「ええ、最近動いてないから思いっきり行くわよ？」

董君雅さんがかなり大きな偃月刀を構える。

そして審判が両者を見て一置き・・・そして

「始め！！」

開始の合図を叫んだ。

三者視点

始めに動いたのは董君雅、偃月刀を下段に構え斜めの体制で突っ込んでくる。

「ふっ！！」

下段の偃月刀を振り上げるようにして桜花に放つ

ギャリィ！

それを桜花は刀に滑らせるようにして受け流しもう片方の黒刀で切りつける。

が、それを董君雅は振り上げた勢いを利用して後ろに下がりかわす。

「やるじゃない。風華」

「いえ、そんなことはないですよ」

互いにそんな言葉を交わす・・・が、次に動いたのは桜花。

董君雅の目の前から消えた。

「なっ・・・！！？上！？」

「おお！！」

「おおおおお！！？」

ギイン！！

振り下ろされる白刀を偃月刀でなんとか受け止めるが、その瞬間桜花は白刀を手放す。

「うぇっ！？」

いきなり手ごたえの無くなった董君雅はびっくりして少しだけ動き

を止める。

「隙ありです、董君雅さん」

その隙を見逃さず、桜花は着地と同時に董白の首元に黒刀を突き付ける。

董君雅は偃月刀を上に掲げた万歳の様な姿勢だ。どう見ても完全な敗北。

「負けた・・か。強いね風華。」

「いえ、単に董君雅さんより強かっただけです。俺より強い人は多分一杯いますよ。」

・・それはこの世界に居るのか・・？ｂｙ作者

とはいえ、桜花君は董君雅さんに勝ち見事客将になった。

ちなみに雛里ちゃんも試験に無事合格。その時軍師が泣いていたとか。

聞くところによるとその軍師が「９歳の少女に負けた・・・うううううわあああ！！」と言って走り去って行ったとのこと。

「さて、と雛離ちゃん。無事に合格出来たみたいだね。おめでとう」

「うん！お、桜花さんも・・そのかっこよかった・・！／／／／」

「ははは、ありがとう。」

そんな会話を俺と雛里ちゃんがしていると、影から俺達を見る視線に気づいた。

「ん？」

「え？どうしたの？」

「いや・・そこに隠れてる子がいてね。どうしたの？出ておいで～？」

すると柱の後ろに隠れていた子供が出てくる。こ、この子は！！！？

「あ、あの・・・」

「んん？・・きみってまさか董君雅さんの娘さん・・？」

そう出てきたのは幼いころの董卓ちゃん。可愛いよ、具体的に言うと雛里ちゃんとおんなじくらい。

「へぅ・・はい、と、董卓といいます・・！」

「へえ・・で、どうしたの？迷子？」

「ま、迷子じゃないです・・！」

まあ、自分の家だもんね。迷うわけないよ

「桜花さん・・自分の家で迷子はないと思う。」

雛里ちゃんに言われちゃった・・

「うん・・まあ、分かってたよ。で、どうしたの？」

「え、いや・・お母様に新しい客将の人が入ったって聞いたから・・」

「ああ、見に来たのか。どんな人かな～と」

「は・・はい／／／／」

ははは、董白さんは大胆すぎるからな～だから董卓ちゃんがこんな大人しい性格になったんだよ・・・全く。かわいいけどね！

「ははは、で？どうだった？観た感想は」

「へぅ・・や、優しそうだな～って・・」

「・・・」

な、なんか雛里ちゃんの視線が怖いんだけど。なんで？

「そ、そっか～。ありがとう。あ、こっちは鳳統ちゃん。君と同い年くらいかな？仲良くしてあげてね？」

「は、はい！えと・・董卓です！」

「あ、うん・・ほ、鳳統でしゅ！」

雛里ちゃんの視線が外れた。それとまた噛んだね。同い年でもダメなのか。

まあ、なんにせよ雛里ちゃんにも友達が出来るのはいいことだよ。

う～ん・・でもそろそろ雛里ちゃんを水鏡塾に入れた方がいいかな・・？

「迷うところだね・・」

雛里ちゃんと董卓ちゃんが後ろの方で仲良さげに話してる中でそう考える桜花君であった。

雛里と桜花の旅・・・1（後書き）

洛陽では、2，3話くらい滞在します。

雛里と桜花の旅・・・2（前書き）

洛陽での一日。

雛里と桜花の旅・・・2

桜花です。現在は洛陽に滞在しています。
客将として雇ってもらって一晩が開けました。

「ん～・・あ、おはよう雛里ちゃん。昨日はよく眠れたかな？」

「あ、桜花さん。はい！昨日は月ちゃんと一緒に夜遅くまで話しちゃいました！えへへ」

「あ、真名まで交換したんだ。仲が良いようでよかったよ。」

「ふあ～・・んにゅ・・？」

そんな話をしていると寝ぼけた董卓ちゃんが出てきた。
意識が半覚醒状態だからか容姿が崩れている。
綺麗な髪は所々寝ぐせが付いており寝巻き？なのか着ている服は崩れて、右側の肩や鎖骨が見えている。

「ははは・・董卓ちゃんは雛里ちゃんほどしっかり起きれなかったみたいだね？」

「あわわ・・月ちゃん！ほらこっち来て！！」

そう言ってあわてた雛里ちゃんが部屋の中に董卓ちゃんを連れていった。

「ううん・・え？雛里ちゃｎーーー！？」

バタン！！

うん、しばらくかかりそうだね。じゃあ・・・領主さんの所でも行きますか。

・

・

・

で、着いた王座の間。董卓ちゃんのお母さんが軍師の方と話している。

あ、こっちに気付いた。あれれ？軍師さんが行っちゃったぞ？

「おう、風華。起きたか。」

「はい。あ、そうだ桜花でいいですよ？一応今は仕える身ですし、真名を預けます。」

「お、そうか・・じゃあ、私のも預けよう昨日のお前の武は素晴らしかったからな！」

おお、なんか光栄だね。

「我が真名は陽(ひな)。お前にこの真名を預けよう！」

「ありがとうございます」

こうして俺と陽ちゃんは真名を交換したのだった。

・

・

・

しばらく陽ちゃんと話していると・・なに？なんでちゃん付けか？
そりゃ俺が年上だからだよ。だっておれ６００歳超えてんだぜ？
まあ、話してたら雛里ちゃんと董卓ちゃんが来た。

「す、すいません！遅れました！」

「大丈夫だよ、雛里ちゃん。まだ忙しい時間帯でもないし。董卓ちゃんもおはよう」

「へぅ・・おはようございます・・／／／／／」

朝の事が恥ずかしかったらしく、顔を真っ赤にして俯いた。

「さて、では仕事をしてもらうぞ。桜花、鳳統。桜花は街の警邏。
鳳統は軍師達と共に文官の仕事をしてもらう。」

「はい」

「は、はい！」

早速仕事を貰った。いろいろ仕事の説明を受けた後、俺と雛里ちゃんは仕事に向かった。

「じゃあ、頑張ってね？雛里ちゃん。」

「う、うん！頑張る！」

・

・

・

街

「警邏って言っても・・・暇だな～・・・」

俺は城を出た後街に来ていた。あの領主の性格のせいか・・賑やかだな。皆楽しそうにしている。

こういう街は凄く好きだ。

・・・そう言えば、天の御使いの一刀はどうなったんだろう・・？

ま、生きていればまた会えるさ。
一応、あいつには俺の能力で一つだけ呪い？みたいなのをかけてあるし。

「さて・・街の入り口に来ちまった・・」

この洛陽は街は賑やかだがそれほど広いわけではない。おおよそ半径５００ｍほどの土地だ。城は入口の方に近く建てられているから入口には３００ｍほど歩けば着いてしまう。

「・・・戻るかな。「！！！」ん？」

振り向いて城へと向かおうとした時何か声が聞こえた。気になったのでそちらへ向かう外の林の中に入って行くと

「ちょっと・・はな・・離しなさいよ！！」

「だまれ！おらこっちへ来い！！」

「へへへ、こいつは上玉だぜ・・」

二人のガラの悪い男と一人の少女・・てかあれは・・・賈駆ちゃんじゃないか！

「なんでみらいの董卓軍の名軍師がこんな・・」

「！？だれだ！？」

ヤバいばれた。

「ばれちゃったら仕方ないよね～・・」

草木をがさがさとかきわけて出ていく。男はこっちを向いて表情を荒げている。

「さて・・・やってることは分かるよな？」

「くっ・・はん！だがお前をやっちまえば関係ねぇよな！！」ごお！

そう叫んで二人の男は飛び込んできた。

「きゃあああ！！」

賈駆ちゃんが叫んで目を手で覆う

「ふっ・・・」

俺は歩いて賈駆ちゃんの元へ行く。

「大丈夫かい？」

「え・・？なんで・・？」

後ろへ流された男達を見る賈駆ちゃん。しかし二人は気絶してした。

「嘘・・どうやって・・」

「まあ、疑問はいろいろあるだろうけど、今は・・怪我はない？」

「え？う、うん・・」

そして賈駆ちゃんの手をとり城へと戻った。

・

・

・

賈駆視点

私は、村を出て旅をしていた。１０歳で旅に出るのは危険と言われたが、意見を押し通して挙句の果てには夜逃げのように村を出た。

その後私は2週間ほど情報収集を行い、洛陽は善政が行われていると聞き洛陽までやってきた。

それなのに門の前にいた男二人が私をみて下賤な眼をして寄ってきた。

「へへ、姉ちゃん。良い体してんじゃねえか・・」

「ちょっと付き合ってくれよ・・」

私は強いわけでもない、どちらかと言えば知に秀でる方だ。だから私は強引に林に連れ込まれた。

「ちょっと！何すんのよ！！」

「良いからこっちへ来い！」

ぐい！と腕を引っ張られた。

「ちょっと・・はな・・離しなさいよ！！」

「だまれ！おらこっちへ来い！！」

「へへへ、こいつは上玉だぜ・・」

すると草むらから男の人の声が聞こえた。

二人はそっちの方を向いて

「だれだ！？」

そう問いかける男の一人。

「ばれちゃったら仕方ないよね～・・」

・・・なんかかなり陽気な人だ

でも、その後の事はよくわからなかった。男たちが襲いかかったが

分かったのはそこまで

次には

「大丈夫かい？」

そう声を掛けられていた。

・　・　・

桜花視点

そのまま賈駆ちゃんを連れて城に戻ってきてしまった・・どうしよう

「あのー・・君、頭いい方？」

「え？た、多分」

わお頭いいって言っちゃうんだ

「じゃ、ここに仕えてもらっていいかな？」

「・・・此処の主に寄ります。」

さっきから気になってなけど・・賈駆ちゃんってこんな口調だったっけ？もっと砕けたツンデレ口調だったような・・

「ま、いいか・・それはさておきさっきは危なかったね。怪我はないかい？」

「え！？あ、はい！さっきはありがとうございました！」

「そうか。怪我がなくてよかった」にこり
後ろに顔を向けながら笑顔になる。
「っ！／／／／そそそそんなべべべつになにもされてなかったし、
アンタが助けてくれたから別に平気！」
「あ、やっと素の口調になったね。そっちの方があってるよ。」
「あ！？／／／／／」
そんなこんなで王座の間。
「そんなわけだからこの子軍師か文官として雇ってくれ。」
「うん、良いよ。」
「良いの！？」
はい賈駆ちゃんが洛陽入りしました。主がど―のこ―のはうやむやになりました。
ちなみに何故か知りませんが、寝室は雛里ちゃんと董卓ちゃんと一緒の部屋らしいです。
なぜ幼女・少女を同じ部屋に入れるんでしょうか？何らかの意図を感じるね！

「あ、アンタ！さっき助けてくれたからお礼に・・・わ、私の真名を預けてあげる！私は詠よ！」

「え！？いきなりだね！・・・うん、俺は桜花だよ。これからよろしくね詠ちゃん♪」

「よよよよろしくしてあげなくもないけど！！？／／／／／」

そのあと小さいときはツンデレもデレの方が大きかったんだなと感じていたら雛里ちゃんと董卓ちゃんに睨まれました。

なんで？董卓ちゃんも？なんで？

雛里と桜花の旅・・・2（後書き）

次は雛里の日常です。

雛里と桜花の旅・・・3

どうも、私は鳳統です。真名は雛里。
今私は、洛陽で陽さんの・・・あ、陽さんとは真名を交換しました。
それで、陽さんの城で仕事をしています。
私と一緒に旅をしてる桜花さんは客将として街の警邏をしています。
あんまり会えなくて少しさびしいです。

「まったく・・桜花さんは・・」

「雛離？どうしたのよ？」

私に話しかけてきたのは先日桜花さんが連れてきた女の子、名前は詠ちゃん。今ではこの城で働くお友達です！

「いえ、なんでもないです・・」

私の考えていたことは、その詠ちゃんの事。桜花さんが連れてきたことに少しだけ嫉妬しちゃってるんだと思う・・

「ふふ・・雛離ちゃんは桜花さんが詠ちゃんを連れてきたことに嫉妬してるんだよ」

「あわわ！ゆ、月ちゃん！！」

月ちゃんがいきなりそんなことを言うものだからあわてて声を上げたけど、詠ちゃんはすこし納得いかないような感じで笑ってた。

「へえ・・雛里はアイツとはどんな関係なの？」

「え!?どどどどんなって!べべ別になんにも・・／／／／」

「へぅ・・詠ちゃん大胆なの・・」

「・・桜花さんは・・大切な・・家族です・・・／／／／／」

私は恥ずかしながらもそう言った。私のたった一人の家族。そして私が大好きになった人。

それが兄であり想い人、桜花さん。私が兄と呼ばないで桜花さんと呼ぶのは、兄妹だと結婚出来ないと知っているからだ。

「ふ～ん・・で、月はどうなのよ?」

にやにやしながら標的を月ちゃんに変更する詠ちゃん、正直助かったな・・

「ええ!?いや・・べつに!私はその・・!!・・・へぅ・・／／／／／」

「顔が真っ赤よ月」

「むぅ・・そういう詠ちゃんはどうなの!?」

にやにやしてる詠ちゃんに月ちゃんが反撃する。すると詠ちゃんはあわてて言った

「わ、私はべつにあんな奴・・好きじゃないわよ!／／／／／」

「「・・・・」」

ぷいっと顔をそむけながら顔を真っ赤にして言う詠ちゃん・・はあ、相手が多いなぁ・・

「・・・・詠ちゃん、月ちゃん。」

「なんですか？」

「なに？」

「負けないからね！」

そう言うと、二人は二コリと笑って言った

「「当たり前よ（です）！」」

・　・　・

夜

月視点

私は今、城の中を歩いている。隣には先刻雛里ちゃん達と話してた人物。桜花さんがいる。
桜花さんは詠ちゃんを連れてきた日の夜に私に真名を預けてくれた。
私も桜花さんに真名を預けている。

「ねえ、月ちゃん。」

ふいに桜花さんから声がかかった。

「なんですか？桜花さん」

「月ちゃんはこの世の中をどう思う？」

なぜ、そんなことを聞くのか分からなかった・・でも

「私は・・酷い世の中だと思います。」

「どうして？」

「今、私達はこうして暮らしているけど・・その裏ではなにも食べられずに飢えて死んでしまう人や賊になって殺される人が大勢います・・だからです。私は・・そんな人達を笑顔に変えられたらどんなに素敵なことだろうって思います。」

私は常日頃から思っていた。戦の度に怪我を負う兵士さん達、包帯が増えている母、涙をこぼす家族を見て来たから。
私はまだ幼い１０歳の少女だから、何もできないことに少しだけ胸を痛める。

「そっか・・」

桜花さんはそんな心を感じてくれたみたいに返す。

「それなら月ちゃんは誰よりも優しいんだね。うん、きっとこの洛陽はもっと良い国になるよ。俺が保障する」

「・・・」

桜花さんは笑った、私はその笑顔に見とれた。背後に浮かぶ月が桜花さんを照らしていた桜花さんの姿を輝かせた。
そんな桜花さんはとても・・綺麗だった。

「／／／／／・・あ、ありがとうございます・・」

「？」

顔が真っ赤になる、恥ずかしくて少しだけ前に出て顔をそむける。

「・・・桜花さん」

「なんだい？」

「私は・・この国を・・私のこの手が届く全ての人を笑顔に変えて見せます！」

「・・・・そっか、応援するよ」

私達は互いに微笑んでいた。綺麗な夜空に浮かぶ月の下で・・・

・

・

・

翌日

「陽ちゃん」

そんな言葉を投げかける桜花さん。雛里ちゃんも首をかしげている

「なんだ？桜花。どうかしたか？」

お母さんも疑問なのかそう返した

「そろそろ、この町を出ようと思います。」

「「「「えっ！？」」」」

私とお母さん、詠ちゃんに雛里ちゃんもそんな声を上げた。

「ちょ、ちょっと待て。急すぎないか？」

「そうですよ！もう少し此処に居ても・・」

私とお母さんは、引きとめた。

「ははは・・いや此処に居る事はそれはそれでよさそうなんですが・・ここにきてもう一ヶ月経ちましたし・・まだまだ旅も続けたいので」

「そうか・・・さびしくなるな」

お母さんはさびしそうにしている。桜花さんとお母さんは度々、時間を見つけては手合わせをしていたから余計にさびしいのだた思う・・もちろん私も寂しい。詠ちゃんだって引きとめたそうにしてるけど抑えてる。

「・・・はあ」

桜花さんは少し息を吐いてこう言った

「そんなに寂しそうにしない。また会いに来るよ、きっとね」

「ほんとうですか？」

「そうだね・・月ちゃんや詠ちゃんがもう少し大きくなったらまた会いに来よう。」

桜花さんはカラカラと笑って私と詠ちゃんの頭を撫でた。

「ん・・／／／」

「へぅ・・／／／／」

こんな風に撫でてもらうことは結構あるけれど、実はかなり気持ちがいい。

「・・分かった、では送迎の宴をしよう！！」

お母さんがそう言った。

「いいんですか？」

「ああ！短い間とはいえお前もまた私たちの仲間だ！ならば相応の宴を持ってしかるべきだろう！」

お母さんはそう言うとぴゅ―と駆けて言って、宴の準備をしろ！と奥で騒いでいる。

「・・雛里ちゃんもゴメンね？急に決めちゃって・・残りたければ残ってもいいんだよ？無理して付いてこなくてもいいんだし・・」

「いや、私は桜花さんについていくよ！家族なんだから！」

そんな会話をしている桜花さんと雛里ちゃん
すこしだけそんな関係がうらやましかった。

・

・

・

夜

桜花視点

その日は凄い盛り上がりを見せた。街の住民や兵士も参加した国を挙げての大きな宴。
月ちゃんは笑顔で見ていて、その隣では詠ちゃんが不機嫌そうにお酒を飲む。
雛里ちゃんは顔を真っ赤にして目をまわす。陽ちゃんは高らかに笑いながらお酒をがぶ飲みした。

そして、皆が眠り静かになった。とても楽しい一日だった。
そして俺は雛里ちゃんを起こす。

「雛里ちゃん。起きて」

「ん・・んぅ・・？桜花さん・・ふあ・・」

「うんそうだよ。そろそろ洛陽を出るよ。歩ける？」

俺は雛里ちゃんにそう問いかけ、手を引く

「うん・・だいじょうぶ・・・」

まだ少しだけ顔が青白い。見ると詠ちゃんも顔を青くしてうなされながら倒れている。やっぱり１０歳の体でお酒を飲むのはいくら無礼講でもやめさせた方がよかったかな？

「行っちゃうのかい？」

そんな考えをしていると、後ろからすこし寂しそうな笑顔でこちらを見る陽ちゃんがいた。

「・・まあ、少し寂しいですがね？」

「そうかい・・ふふふ、まあいつでもおいで。歓迎するよ」

「ありがとうございます♪じゃあね陽ちゃん」

「ああ」

そう言って俺達は洛陽を出た・・・

雛里と桜花の旅・・・3（後書き）

次回はメンマ好きのあの人（幼女期）が登場！

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n1811ba/

世界を周るは転生者(チート)ｉｎ恋姫無双

2012年1月13日01時46分発行